

国立東京療養所 寿康館にて

真の葡萄樹

――ヨハネ伝第15章1～9節――

1956年8月

小池辰雄

序言 本体と影像 神は農夫 結実 潔め 内住 万願成就 「わが愛に居れ！」

【ヨハネ15・1～9】

1 我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。7 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

●序言

そろそろ葡萄がみのり出したので、今日はヨハネ伝第15章の有名な葡萄のところを学びます。新しい方もだいぶお見えのようですが、どうか私がお説教をすと思わないでください。皆さんと一緒に、今ここで読みました1節から9節の葡萄の樹のすがたになりたいと思うのです。聖書の真理は認識されておしまいというようなものではなく、つねに新たに限りなく深くそれに化体してわかるべきものなのです。

例えば、水泳を身につけようと思うなら、水泳の本をよみ、畳の上で泳方を学んでも、それだけではダメで、どうしても水に跳び込んで、沈んだり浮いたり水の何杯かは呑みなくてはダメでしょう。そのように聖書も研究だけでは身につかず、聖書の中に跳びこみ、その現実に関わりあひ浸して聖言が化体しなければダメなのです。聖言を信ずるとは、そのように根源的に全身的に受けとることです。



● 本体と影像

さて第1節、

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。」

キリスト・イエスはご自分がまことの葡萄の樹だと言われました。ここに姉妹が菊の花を飾ってくださいましたが、

「私は本当の菊の花だ」

というのと同じことです。それはちよつと妙に響きます。

「私は菊のようなものだ」

というならまだわかりますが。ゲーテの『ファウスト』という有名な劇詩があります。あの詩の最後の一段に、

“Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis.”

「すべてうつろいゆくものは

影像に過ぎない。」

という句があります。

「現世において私たちが見、聞き、触れるこの移りゆく儚きものは、影像、似姿に

すぎない」

という。本体界の本体がこの現象界に投影しているにすぎない。本体は彼岸にあるというわけです。どんなに鮮やかに水に映っている鳥の影も、ついにそれは影であつて鳥は空を飛んでいる。プラトンもそういう角度から現象界を見ていました。

ところで、この影像にすぎない現象界に、実は唯一つ本体界が現象して来た事実があるのです。これが「イエス」という人物です。だから、イエスは

「我はまことの葡萄の樹だ！」

と言われたので、この「まことの」（アレーティネー）の一語にそういう深い意味がある。イエスは、この私たちが秋に見、また食べるところの葡萄よりご自身が、

「もつと素晴らしい葡萄だよ」

と言われる。即ち、

「本ものはこつちで、自然界の現実の葡萄は我を表現している影像だよ」

と言われる。これと同様のことをイエスはサマリヤの女にも言われた。即ち、

「ヤコブの泉の水を飲む者はまた渴くけれども、私が与える活ける水を飲む者はいつまでも渴かない」

と。これはイエス自らが真の泉であることを語られたわけです（ヨハネ伝第4章参照）。霊的な本体たるキリストが受肉されて、イエスとなつたわけなので、人間界や自然界のいろいろな現象をとらえて、これを本体の比喩として、表現として、似姿として語られた。即ち、



現実の葡萄の樹の方がキリストをあらわしている表現体、言葉であるというわけです。イエスという人は、ご自身が、神を表現している言葉なのです。イエスにおいて生ける神の独一の似姿があらわれた。ですから、

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

と言われた。この啓示的事実の前に人間のとるべき態度は、理解でも、認識でもなく、ただ、「信か不信か、然りか否か」のほかにない。そこには全身の応答のほかに道がない。これが実存的応答と申します。思索や研究や認識は、哲学や科学の世界。しかし、聖書の世界は実存的応答、信的行為認識の世界です。これに跳びこみ、体あたりして、ぶったおれて、

「そうだ、あなたは本当に活ける神の子、キリスト、わが主です、救主です！」

といって降参するのであれば、素晴らしい無限の世界に、永遠の本体界に入れない。

実はキリストは、私たちをこのうつりゆく現象界にありながら、そういうキリストと同じ移りゆかざるものに、変質変貌させようとなさっている。これを福音というのです。キリストという永遠の生命が、影の如き私たちの中に形をとろうとしておられる。本体の核をうちに宿す「似姿」としようというのがキリストのご本願であります。

さきほど、病棟の廊下を歩いていたら、君たちのお骨折りで各病棟に、

「人生の目的は神を識るに在り」

との演題を今日の私の話のために掲げておられるのを拝見しましたが、その「神」は実にナザレのイエスを識るのしなければ知れない。しかも、「イエスを識る」とはどういうことかとなると、今申しました如く、頭で知るのは毛頭ないわけでした。

●神は農夫

「わが父は農夫なり」

と。イエスにとつては、神は親しい「父」であり、偶像には絶対にならない聖なる霊であります。そのことは同じくヨハネ伝第4章のサマリヤの女との会話の終りに出てくるキリストの告白でよく掴みとってください。この父なる神は、この場合、葡萄の樹を栽培する農夫です。

一体、葡萄の樹は、橄欖と無花果と共にパレスティナには非常に重要な樹で、旧新約聖の記事の至るところに散見できます。葡萄を主題にして聖書の多くの箇所をお話することは今日の眼目ではないからやめますけれども、あの方舟で有名なノアは農夫で葡萄園をつくることを始めたといふ創世記9章に書いてあります。また、列王記の上4・25によれば、

「ソロモン王の一生の間、ユダとイスラエルは北の端ダンより南の端ベエルシバに至るまで天下泰平で、誰でも葡萄の樹の下と無花果の樹の蔭に宿った」

と書いてあるくらいです。



父なる神はイエスにとっては農夫ですから、季節や天候をわきまえ、土壌の成分性質を知り、環境地勢に順応していろいろ按配するすべを心得ているので、一切を委ねきつています。イエスという葡萄の樹は全世界に枝を拡げうる霊木で、枯れることを知りません。（イザヤ書27・2～6に素晴らしい終末的栄光の記事が予言されてあるからあとで学んでみてください。）キリストは正にエデンの園の「生命の樹」（創世記2・9）をもつて象徴されている本体です。

● 結実

² おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。

本当は、真にイエスの中に在るならば、果を結ばないわけではないのですが、

「聞けども聞こえず、見れども見えず」

といったように、

「イエスの中に在れども在らず」

といった在り方が、我々基督者でありながら、多いわけです。イエスは、

「そんな信仰は信仰でない」

といったお気持ちから、こう言われるのです。この原語

「パン・クレーマ・エン・エモイ」

「われに在るどの枝でも」

は実は当たり前のことなのです。私たちが樹を見て枝が幹につらなっていないと誰が思いますか。あまりに当たり前のことなので、何とも思わないでいるわけですが、たまたま髓を蝕まれた枝があつて葉が枯れていると、

「あつ、枯れている。あの枝は枯れている！」

と驚きます。ところが、人間界はこれと反対で、神さまの恩恵を受けていながら、神とのつらなりを自分の方で塞い（ふさ）でいるものですから、みな駄目な枯れ枝になっている。たまたま神と深いつらなりの中に生きている人があると、

「ああ、あの人は素晴らしい人だ」

といえます。それならまだいいですが、

「どうも、あの人は変だ、変わりものだ」

といって別扱いをします。イエスがそんな変わりものの扱いにされたことがマルコ伝6章の始めに書いてあります。正に樂園喪失（パラダイス・ロスト）の世界は価値の転倒を来たしています。キリスト教界そのものが実はその判断の転倒を来たして、福音の本来の面目に立ち帰ろうとする人たちをとかく言っているようです。神の子イエスがあの当時そうであったばかりでなく、大使徒パウロも、

「ナザレの異端の首」（使徒24・5）



と悪口されています。

さてそこで、皆さん、私たちはこの本来の当^{あたり}、前^{まえ}の世界に、神という太陽の光を全身に浴びる世界に、キリストという葡萄の幹につらなる枝の世界に本当になるうではありませんか。すこしあとの第5節にイエスはこの当たり前^{あたりまえ}の現実を告知しておられるのです。即ち、

「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり」

と。このイエスの現実告知をそのまま受け^{うけ}と^とることを「信ずる」というのです。キリストが現に私たちは彼の枝であると断定しておられるのですから、

「でも私はまだ、ダメです」

といって自分の側を見て疑う余地を余さない絶対恩恵の実力の宣言なのです。「でも」という人は、

「やがて自分の信仰を強くし、自分の実存を立派にし、自分の聖書研究を深めて、キリストにつらなろう」

とでも思っているのですが、もしそれができるなら、イエスは十字架にかかって私たちのこの「でも」をぶつ飛ばす贖罪をしてくださるには及ばなかったのです。

ところが、こういう贖罪の裏付けをもつて、実力の迫りをもつて、

「私は葡萄の樹、お前たちは枝だよ」

と言っておられる。さてこの実力は何でしょうか。幹から流れてくる樹液です。ちょうど私たちの体で、心臓から迸り出てくる血液が手のさき足のさきまで回り巡っているのと同じです。

「血には生命がある」

と創世記9章の始めに書いてありますが、生命なる血が流れているので、我々の体の枝なる手足が自由に動くように、キリストの樹液、キリストの血、復活の生命、永遠の霊生、みたまの生命が、枝なる我らの中に流れてくるつらなりとなれば、私たちは真に生き、かつ動き、かつ在るという事態となり、果^みは結ばざらんと欲すいえども能わずといったことになるわけです。

「汝らは枝なり」

といわれたら、

「ハイ！ そうです」

といって相手の言葉をそのまま魂の奥底で受けとる。これを信仰というのです。信とは、我らの在るがままの姿で、ダメなまままで、頑^{かた}なまままで、分裂のまままで、罪けがれのまままで、主とその聖言を率直に受けと^{うけと}ることです。これはいわゆる知・情・意を乗り越えた霊、たましいの受けとりです。すると、私たちの全存在の中心に、その信じ受けた現実が成り、核的なものが形成されるのです。ここに信^{うつつ}が現^{うつ}である深い消息があります。それは内的現象であつて、本質的変革が起こるのです。



「人あらたに生まれるのでなければ」(ヨハネ3・3)

とイエスが言われた消息です。私が半ば冗談のように申す霊核たまという事態で、これは実は真理なのです。このキリストのみ霊たまという霊核が我らの中に生ずると、必ずその人その人にふさわしい果が結ばれてゆきます。

「おまえはもう私の枝じゃないか、何を心配するかね。さあさあ私の生命のつらなりで、生命にしてやるよ」

と響いてきたら、深く瞑想し、祈って、キリストの枝となることです。必ずなれます、聖言みことばの現実の力、み霊の現実の力でありますから。そして率直に主に告白し、直ちに枝となつて行動することです。そしたら、もうその告白も行為も、実は花であり、果であるのです。なるほどキリストの言は、

「霊いのちなり生命なり」(ヨハネ6・63)

アーメンと悟ることができます。芸術家ならその芸術に、学問する人なら学問に、事業家ならその事業に、病者ならその生命力に、台所で働く人ならその料理の技能に、医者ならその医療に、それぞれ神の力と生命と愛と知恵とが自由に現われてくる。これをキリストは「果を結ぶ」といわれたのです。結果という言葉の本来の意味は、神の栄光のあらわれであつて、御利益ごりやくではありません。

皆さんは外側の病人ですが、実は健康者も病人も同じことです。パウロは

「義人なし、一人だになし」

と言いましたが、同じように、

「健康者なし、一人だになし」

なのです。私たちはみな罪びと、みな病者です。しかし、キリストの十字架の贖いで罪から潔められ、復活の霊生を、み霊の生命を受けとつたら、皆さん、本質的には内的には既に義人であり、健康者なのです。ですから、いよいよ義人とされ、いよいよ健康にされてゆく。

この罪の世の現実では、究極的には、内外は相即しません。終末の新天地の到来までは、現実のずれはやむを得ません。しかし、罪に対する勝利、死に対する勝利、陰府よみとサタンに対する勝利は、既にキリストの全人的贖い、霊肉両方のあがないによつてもたらされているのですから――イザヤ書53章をよく読んでください――彼を信じ、受けとることによつて、本質的に、内的に義と永遠の生命と、天国と神の支配の中に我らが無限に入れられてゆくのです。こんな悦ばしいことが何処にありますか。キリストの福音とはこんな素晴らしい輝かしい世界を約束し、かつ、現に与えつつあり給う現実告知なのです。

「エホバは汝のすべての不義をゆるし、汝のすべての病をいやし、汝の生命を滅亡ほろびより贖い出だし、仁慈と憐憫あわれみを汝に蒙らせ、汝の口をよきものにてあかしめ給う。かくて汝は壮わかやぎて鷲の如く新たになるなり」(詩篇103・3～5)



とはキリストによって我らにもたらされた内的現実です。皆さんはこのキリストを受けとった以上、もう本質的には断じて病人ではありません！ 病気になることが、このキリストを受けとる契機となった意味において、大いに感謝していい。しかし、病気そのものを有難いと思つて、病気の親友になどなつたらダメですよ。本質的には

「我汝と何の関わりあらんや」

と病気に言つてやりなさい。

「私はキリストのものだ。私はキリストのいのちだ」

と言つてやりなさい。病気はもう逃げ足です。医者や医療や医薬はすべてあなた方に正しい意味と位置と役割において働くでしょう。しかし、生命を与え給ひし創造の神が、最も根源的な医者であることを忘れてはダメです。

「我は汝を医す者なり」（出エジプト15・26）

とある如くです。しかし、これはどこまでも根源的なことをいつているので、私たちが病気の現象に囚^{とら}われないことが健全な考えです。私たちが囚^{とら}われていいのは根源なる神とキリストだけで、その他のいかなるよき現象に囚^{とら}われてもダメです。それはその現象を偶像化することになります。現象を超越する者こそ、現象を支配し、また、真に現象することのできるのです。果を結ぶのです。あなた方が、否^{いな}、われわれすべてがそういう根源^い、信^のの人になれば、もう大丈夫、勝利ですよ！ そはキリストが我らを通して勝ち給うからです。これがつらなりの事態における根源と果の性質です。

● 潔め

この「潔める」とあるのはどういうことか。アンドリウ・マーレーによると、旧き枝を相当深く枝もと近いところから切り落とすことだそうです。われわれにおいても梅や柿なども翌年よく実がなるために枝を払ったりしますね。そういうことらしい。信仰の事態もそうなんです。信仰も実存もそれが私^{わたくし}されてきたらダメになります。つねに新たに、おのれを乗り越え、切り捨ててゆく相^{すがた}が大切です。それで私がいつも「無」と申すわけなのです。

「肢体を義（キリストの義）の器として捧げよ」

「今この肢体を捧げ、義（キリスト）の僕となりて潔きに到れ」

とパウロがロマ書6章でいうように、われらの実存も信仰も「捧げ」の事態です。パウロは更にいいました、

「己が身を神の悦び給う潔き活ける供物^{もてなえもの}として献げよ、これ霊の祭なり」（口

マ12・1）

と。ところで、私たちを潔める根源の事態はいうまでもなく、キリストの贖罪^{しよぐわい}の血です。

「永遠の御霊^{みたま}により、瑕^{きず}なくして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの

良心を死にたる行為より潔めて活ける神につかえしめざんや」（ヘブル9・14）



「まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許とおもうか」(ヘブル10・29)

とある如くです。キリストの贖罪による義認と聖化は一すじの恩恵の事態です。これも二段構えではありません。成長・発展・展開は我らの罪の現実における必然の過程ですけれども、恩恵の事態はすべて一貫しているのです。

³ 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。

とイエスは更に言われました。イエスの言、神より来ているイエスの言は、ヘブル書4章12節の、

「神の言は生命あり、能力あり、両刃の剣より利くして精神と靈魂、間節と骨髄を透して之を割ち、心の念と志望とを験すなり」(ヘブル4・12)

とあるように、キリストの言は、生命であり、力でありますから――そのことは福音書の記事が証言して余りあります――これを水を割らずに受けとる人、信ずる人は生命と力の世界に入り、受けとらない人は残念ながら入れないというわけです。

ですから、言がその人の魂の相をふきわけてしまうのです。神・キリストの聖書の言に、あるがままのおのれをぶつけ、ぶつ倒れる人が救われる。私たちは神の審判が恐ろしいと思つてはダメです。神は審判しつつ救い上げてくださる。罪から潔めつつ生命の豊かな世界に入れてくださる。ですから、審判と恩恵が一本です。ただ、この審判がキリストを通して贖罪的に、

「自ら我らの不義を負いつつ、主自らが審判を荷われた」

ところに、義と愛の驚くべき貫きが圧倒的な愛として、また限りなく深い義として与えられてきたのです。そういったキリストという神の「言」によつて、我らは既に潔められてあるのです。何たる恩恵ですか！ 人間的なものを殺して、神的なものに生命づけるのが神の言なのです。

ですから、キリストの言を受けとる者は、ぐんぐんその恵みの中に入ってゆきます。祭司・学者・パリサイ人といった連中が却つてキリストの言を批判したために神の国に入らず、取税人・遊女・罪びと・病者・身体障害者たちがキリストの言を率直に受けとったために、逆に天国へ先に入つてゆきました。彼らはみ言を受けて、ゆるされ、潔められ、癒され、救われたわけです。そして主にあつていよいよ実が結ばれてゆくのです。即ち、隣人にその生命と光と愛とをわかち与えてゆく。枝がのび果が増大してゆくことです。

●内住

⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

むしろ原語の語勢からは、

「私に居なさいよ、私もおまえたちの中に(居るからね)」



という親しい強い確かさのこもったものです。「居れ」の原語は、「メノー」という語で「とどまる、宿る」、英語の *abide* という語に当たります。非常に親しみの深い言葉です。あの復活のイエスが、エマオ途上で二人の旅人の道連れとなつて歩いて行かれた夕の情景を、皆さん、想い浮かべてください。

「イエスがなお先へ進み行かれる様子であつた。そこで、しいて引き止めて言つた、『わたしたちと一緒に泊まりください。もう夕暮になつており、日はや傾いています』イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた」(ルカ24・28～29)

何という慕わしい情景でしょう。これが復活のイエスの愛の迫りであり、愛の泊まりであります。この「泊まる」が「メノー」という語です。ヘンリー・フランシス・ライト(Henry Francis Lyte)の有名な“Abide with me!”(主よともに宿りませ)「日くれて四方はくらく」の讃美歌(39)は主の親しき宿泊を祈り求める歌です。ここでは主が、

「私の中に宿りなさい! 私もおまえたちの中に入って泊まるよ」と言つておられます。いつ、どこでも、いかなる場合にも、私たちは主の中に宿りさえすればよいのです。そして、そのみ力で活動もできれば、そのみ腕に安らかに休ろうて眠ることもできるのです。

皆さんがお休みになるとき、ベッドの中に寝ますね。けれども、どうですか、この聖言に従つて、そのときキリストの中に、みふところに休らう。復活の主は、あなたの方の室に入つて来て共に、否、実にあなたの方の中にみ霊の主が宿つてくださる。あなた方ご自身が幕屋なのです。ベッドの上が既にそのような天国です。このヨハネ伝15章を毎晩瞑想し、主を宿しまつり、祈り深く眠つてごらんください。あなた方は朝ごとに新しき力を得て起き上がれます。そのうちに静にも動にも、

「我れ主の中に、主我れの中に」

ということに、だんだん我らの生活が主の内在の消息になつてゆくわけです。何と有難いことでしょう。「安静時間」とはこのみ霊のキリストの中に「安静する時間」です。もう今までの安静時間とは質がちがってきます。何年も具合の悪かった人も、

「何だか楽になつてきた、力が出てきた」と告白するようになりますよ。

人間は、この驚くべきキリスト、今もなお天界にあり、私たちの中にみ霊をもつて臨んで泊まつてくださるこのキリストを迎えたら、何でも可能になる。こうなつたら、もうあとは楽に身読しんどくできます。

「5……枝がもし台樹につらなっていなければ、自分で果を結ぶわけにゆかないように、お前たちも私に泊まつていないならばダメだよ。我は葡萄の樹で、お前たちは枝だよ。誰でも私の中に居おり、私がその人の中に居おるなら、多く



の果を結ぶ。というのは、私から離れたら、おまえたちは何ごともできないからだ。⁶もし、誰でも私の中に居ないなら、枝と同じように投げ棄てられて、枯れてしまう。人々がこれを集めて火の中に投げ入れ、それは焼かれてしまう。」(私訳)

我という幕屋を開放して主を宿しまつれば、一切は可能となり、主を迎え入れぬ幕屋はどんなによさそうでも終には一切がダメとなり、しまいには火の中に投げ棄てられるという。自力的な、^{りきみ}力味の信仰は、放物線を描いて地に落ちてしまう。これに反して主を信じ、主に在る信、おのれの信仰に絶した信は、急降下爆撃機のように上昇のカーブをもって、聖霊の翼に乗って無限に天界に昇ってゆくのです。

●万願成就

「⁷汝らもし我にやどり、わが言なんじらにやどらば、何にても欲するままに求めよ、さらば(汝らに)成らん。⁸汝ら多くの果を結び、わが弟子となりて

こそ、わが父は栄光を受け給うべし」(私訳)

み霊なるキリストの中に私たちが宿れば、キリストの聖言が^{みことば}私たちの中に宿ってください。即ち、み霊とみ言とは不可離の関係にある。この逆ももちろん真理です。即ち、聖霊のみ言を真にわが胸中に、魂の中に信じ受けとれば、主はみ霊をもつて入って来てくださる。そういう霊と言と我との一、如、^一体の関係になると、もう私たちの欲することが、主のみ言に順応する角度となります。そういうキリスト、本位の念願となれば、万願は成就するのです。私たちの願がどんなに未熟であっても、み霊の主とみ言とが我に内在、化体してくださっている事態においては、み霊の御執り成しによってその願いは潔められ、主と神の栄光のためのものとなるから、例えば病の癒えんことを願っても、それは自己本位でなく、主のものとしての我れ、主の御用のためとしての我れ、捧げられたる我れに関わることであるから、祈りは聞かれるのです。祈ったとき既に聴かれています。

「すべて祈りて願うことは、既に得たりと信ぜよ、然らば得べし」(マルコ

11・24)

という祈りの強いみ言があります。前にも述べましたように、現象の奥において、既に聴かれています。ですから、祈りは実に驚くべき勝利なのです。主に在る祈り、おのれを投げ出したる祈り、主の中に没入したる投身の祈り、

「私はあなたに贖われたものです、どうかあなたののみ旨のままに私を変えてください。変質変貌して、あなたの力、あなたの愛、あなたの光、あなたのいのちとしてください!」

というような^{すてみ}棄身の祈りは必ずきかれています。祈りが勝利の祈りでなければダメですよ! 祈りは真剣勝負です。そして歓喜と勝利へと必ず展開してゆく。



ですから、詩篇をよんでごらんさい。始めは、嘆き、叫び、苦しみ、悲しみ、訴えであっても、終りには感謝、讃美、歡喜、勝利となつて聖名を讃美しています。勝利も、神のもの、主のものだから確實なのです。一切が私されない恩恵そのものなのです。もうそうなったら大丈夫！キリストの御本願を祈っていることになるとは何たる恩恵でしょう。この土の器、塵芥において、主の御栄光が現じ給う。ハレルヤ！ではありませんか！ 祈りにおいて、根源的内的成就を確然と戴きつつ前進また前進ですよ！ 日ごと、夜ごとにね！

かくて我らは使徒たちの如く、キリストの弟子です。使徒的同質のキリストの僕、預言者的同質のエホバの僕となりますから、我らがどんなにみじめな小さな存在でも。神さまは、父は、これによって栄光を受け給うと主は言つてくださる。何たる光榮でしょう。これに過ぐる人生の目的がありますか。

●「わが愛に居れ！」

9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

寄せては返し、返しては寄する波の如く、

「居れ、留まれ、泊まれ、安らえ」

と呼び給う主のみ許に走らんのみです。

「父のわれを愛し給いし如く」

その内容は深遠無量！ 全福音書を身読してください。ヨルダンの受洗において、

「われ汝をよろこぶ、汝はわが愛しむ子なり」

との天来の声ありしより、

「これはわが愛した子、わが悦ぶ者なり。汝ら之に聴け」

と響きし変貌の山に至るまで。否、実に降誕より、復活、昇天に到るまで、イエスは神の愛の具現そのものでありました。愛とは何か。千万言を費やすとも徒ら。ただ、

「この人を見よ！」

の一言にこもる。

「我も汝らを愛したり」

その極みの愛は十字架の主！

「わが愛に居れ」

現に、今、ここに、主は御臨在、親しく私たちにかく呼びかけておられます。聖愛の靈が我らを包んでいます。抱いています。もはや言を絶します。身親しく、主の愛に抱かれ、愛のみ霊をこの幕屋に宿して、今晚も、明朝も、次の真昼も進みゆき、多くの旅人を宿す幕屋と、皆さん！ なりましょう。主の愛を讃えまつらん！

「わが魂を愛するイエスよ！」の讃美歌(273B)を、魂をこめて一緒に歌いましょう。

(『愛泉』誌第6号、1956年9月16日発行より転載)

